

【論文】

ソーシャルワーカーであることの不確かさ —ソーシャルワーカーとしての学びの検討を通して—

浅野 貴博

和文抄録

本研究は、ソーシャルワーカー（以下、SWer）が実践活動に伴う不確かさをどう捉え、どのように向き合っているかについて、SWerとしての学びとの関係に焦点を当て明らかにすることを目的とし、10年程度以上の実践経験を持つ26名のSWerに対してインタビュー調査を実施した。分析の結果、協力者が学びの経験を語る中で述べた、現場で直面する様々な困難が「SWerであることの不確かさ」に関わっており、その不確かさは、1) 専門職としての役割の不確かさ、2) 価値に基づく実践活動であることからもたらされていることが分かった。さらに「SWerであることの不確かさ」への向き合い方が、1) 確かさを求めて、2) 不確かさの受入れ、3) 確かさと不確かさの間でのバランスの三つのタイプに大別できることが分かった。SWer一人ひとりによって異なる不確かさの捉え方は、彼らの支援のやり方や学び、さらには「SWerとしてのあり方」にも反映され、それぞれが分かちがたく結び付いていた。

キーワード：確かさ／不確かさ、フォーマル／インフォーマルナレッジ、プロフェッショナル・ラーニング、ソーシャルワーカーとしてのあり方

I. はじめに（研究の背景）

筆者は、ソーシャルワーカー（以下、SWer）の卒後の学びであるプロフェッショナル・ラーニング（Professional Learning）について調査¹⁾するため、様々な分野の現任の支援者に調査への協力を依頼した。その際、少なくない支援者が「私は“ソーシャルワーカー”ではないんですけど……」と、ソーシャルワーカーではないため調査の対象として適当でないのではないかという懸念を伝えてきた。彼らは、社会福祉士または（及び）精神保健福祉士資格を持ち、社会福祉関連機関・施設

において10年程度以上の実践経験を持つ支援者でありながら、自らがSWerと呼ばれること、そして自らをSWerと呼ぶことへのためらいを持っていた。調査の結果、自らがSWerであることに対して彼らが抱く疑義は、彼らのSWerとしての学びと結び付いていることが分かった。調査を通して明らかになったのは、自らの具体的な学びの経験を語ることで、調査協力者（以下、協力者）にSWerとしてのアイデンティティを振り返ることを促す、または、自らのアイデンティティについての過去の振り返りを思い出させるということである。

自らがSWerと呼ばれること、そして自らをSWerと呼ぶことをどのように認識するかは、単に呼称の問題ではなく、支援者が自らを専門職としてどのようにアイデンティファイしているかという問題に関連している。例えば、隣接領域の他の対人援助職であればどうであろうか。医師や看護師、臨床心理士らが自らの職業を名乗る際に、

2017年1月6日受付／2017年6月7日受理
ASANO Takahiro
ルーテル学院大学総合人間学部人間福祉心理学科
E-mail : tasano@lhther.ac.jp

上記の協力者らのようなためらいを感じるであろうか。自らが医師や看護師、臨床心理士という専門職であるという前提を疑うことはあるであろうか。さらにいえば、彼らは、自らの専門職としてのアイデンティティへの疑義を抱くSWerがいることを理解できるであろうか。堀越(2016)は、医療SWerとして実践に携わっていた際の自己紹介に関し、相手に応じて「相談員」と「ソーシャルワーカー」を使い分けていたが、「ソーシャルワーカー」という時には、いつも、ある種の緊張感、覚悟があった」と述べている。では、SWerとして自己紹介する際に、「緊張感」や「覚悟」を抱かせる背景には一体何があるのでしょうか。本稿では、上述の調査を通して明らかとなった、SWerとしてのアイデンティティと学びの関係性について考察する。

まず、SWerの日常の実践活動がどのような文脈に置かれているのかに関し、実践活動に伴う「不確かさ(uncertainty)」をキーワードに試みていくことにする。

II. 問題の所在

1. 実践の「標準化」vs「不確かさ」の受入れ

今日の急速に変化する支援環境において、SWerを始めとした対人援助職は、様々なレベルにおける「不確かさ」に向き合うことが求められる。そうした中、対人援助実践の文脈においては、エビデンス・ベースド・プラクティス(EBP)の大きな影響の下、不確かさは管理すべき、さらには避けるべきものと捉える見方が強まっていることが指摘できる。不確かさに対するそうした捉え方は、「エビデンス」に主な焦点が当てられる科学的調査の考え方にに基づき、いかにして不確かさを抑え、確かさ(certainty)を高めることができるかに重きが置かれる。こうした流れの背景には、Beck(1992)が名づけた「リスク社会」の影響があることが指摘でき、確かさを高めるというテーゼの下、実践活動における専門職の自律性は抑えられ、実践のやり方を様々なレベルにおいて規制

するという向きが強まっている。

一方で、そうした規制の強化は、専門職に対する信頼の不足を表しているといえる(Evetts, 2008)。Littlechild(2008)は、イギリスにおいて現場のSWerが従うべきチェックリストが次々と出されることの背景に、SWerへの不信感があることを指摘している。SWerは、支援に伴う不確かさをできる限り最小化するために、決められた基準に沿って支援することを求められる。こうした動きは、SWerによる支援を「標準化」する一方で、SWerの裁量の幅を狭めることにつながる。こうした確かさを求めるという大きな流れの中、専門職としてSWerが果たすべき役割は、標準化された手続きに沿った支援を行うことなのであるか。ソーシャルワーク実践は、人と人との関係を扱い、彼らの考えや感情、行動をアセスメントするという複雑で多面的な性質ゆえ、不確かさを伴う。Littlechild(2008)が指摘するように、リスト化された基準には含まれていない側面を見逃すということがあり得るため、実践活動に伴う不確かさを「管理する」という試みには限界があることは否定できないであろう。

不確かさに対し、管理し最小化すべきものと捉える見方の一方で、不確かさは日常の実践活動の一部分であり、さらにクリエイティビティの重要な源泉として捉える見方がある(e.g. Fish, 1998; Higgs and Titchen, 2008)。不確かさに対するこうした見方は、Schön(1983)まで遡ることができる。Schön(1983)は、専門職が現場で行う様々な判断にはある程度の不確かさが関わるとした上で、専門職の判断におけるアーティスティックな側面の重要性を強調している。ソーシャルワーク分野においても、ソーシャルワーク実践の不確かな性質についての様々な指摘がある(Fook, 2007; Howe, 1994; Hugman, 2005; Parton, 1994)。それらの研究は、SWerの実践活動と切り離すことができない不確かさを通して、ソーシャルワークの性質を明らかにしようとする試みといえる。

2. 専門職のナレッジベース

ここまでSWerの実践活動に伴う不確かさに対

する対照的な見方について述べてきたが、各々の見方は、専門職としての知識のあり方を規定する。専門職の知識は、大きくフォーマルナレッジ (formal knowledge) とインフォーマルナレッジ (informal knowledge) に分けることができる。前者は科学的な方法で確立され、明示的な形で表される知識を指し、「理論知」などと呼ばれる。一方、後者は様々な経験に基づく知識を指し、「実践知」などと呼ばれるが、暗黙の形を取るため標準化 (standardise)、または形式化 (formalise) することは困難である。先述の不確かさを避けるべきものと捉える見方からは、フォーマルナレッジに基づいた実践活動が強調される。この立場からは、ソーシャルワーク実践はフォーマルナレッジに基づいておらず、専門職として特有な知識を持たないことが専門性の低さにつながっていると見なされる。それゆえ実践においてフォーマルナレッジを用いることが、SWer が専門職として見なされる上で最も重要なことであるとされる (Gambrill, 2007; Sheldon, 2001; Thyer, 2004; 2008)。日本においても、SWer による実践の確かさを高めるべく、実践の「科学化」の必要性が強調されている (太田, 2009; 芝野, 2005; 2009)。

一方で、不確かさを実践活動の一部として受け入れる立場からは、フォーマルナレッジこそが専門職の知識の中心であり、科学的知識の直接的な応用を専門性と捉える前者の見方に対し異議を唱える。Gray et al.(2009: 13) が「エビデンスは知識の一形態であるが、それだけに過ぎない」と指摘するように、SWer はフォーマルナレッジのみを実践のベースにするわけではなく、様々な経験から得られた知識、すなわちインフォーマルナレッジも用いながら日々の実践活動を行っている。前者の見方が、科学的なエビデンスに基づいた実践を強調するのに対し、後者の見方においては、判断をする際の「直観 (intuition)」の重要性が強調される。その結果、前者の見方からは、インフォーマルナレッジは主観的な考え、もしくは支援をする上でのバイアスと見なされ軽視される。日本においても、インフォーマルナレッジの重要性に関して様々な指摘がなされている。空閑

(2012: 12-15) は、SWer の専門性の向上にフォーマルナレッジが寄与する役割を認めつつ、SWer の実践活動のリアリティに根ざさない知識のあり方に疑問を投げかけ、SWer にとって必要な知識について「ソーシャルワーカーによる援助の現場のリアリティに寄り添うことによって初めて可能になる、ソーシャルワークの『臨床の知』である」(同上, p.14) と述べている。

このように実践活動に伴う不確かさへの対照的な見方は、SWer の知識のあり方の捉え方についても大きく影響を及ぼす。では、こうした見方の違いはどこからきているのであろうか。Helsing (2007: 40) は、不確かさに関し「それ自体としてはポジティブなものでもなければ、ネガティブなものでもない」としており、不確かさに対する我々の理解が限定的であることが、不確かさの捉え方の違いをもたらしているといえるかもしれない。Helsing が指摘するように、不確かさ自体がニュートラルなものとしたら、SWer の実践活動に伴う不確かさに対する捉え方の違いは何によってもたらされているのであろうか。本研究では、SWer が不確かさをどう捉え、どのように向き合っているかについて、SWer としての学びとの関係に焦点を当て明らかにすることを目的とした。

Ⅲ. 研究方法

1. 調査協力者

調査対象は、社会福祉士または精神保健福祉士資格を有し、社会福祉関連の現場で10年程度以上の実践経験のあるSWer²⁾であり、計26名が調査に参加した。協力者の内訳は表1の通り: 1) 性別—男性12名、女性14名; 2) 年齢構成—30代14名、40代9名、50代3名; 3) 実践経験—8~10年12名、11~20年12名、20年以上2名; 4) 実践分野³⁾—障がい14名、高齢6名、児童3名、地域2名、司法1名。サンプリングについては「有為抽出法 (purposive sampling)」(Kuzel, 1992) を用い、第一段階として筆者の人的ネットワークを

表 1 調査協力者

	性別	年代	実践経験年数	実践分野
A	男	40-49	21年	障がい (精神) (※)
B	女	30-39	18年	高齢
C	女	50-59	17年	高齢
D	男	30-39	8年	高齢
E	女	30-39	12年	高齢
F	女	30-39	9年	障がい
G	男	30-39	9年	障がい
H	女	30-39	16.5年	障がい
I	女	30-39	10年	障がい
J	男	40-49	15年	障がい
K	女	30-39	8年	障がい
L	女	40-49	11年	障がい (精神)
M	男	30-39	12年	障がい (知的)
N	男	40-49	7年	障がい (知的)
O	男	40-49	16年	司法
P	女	30-39	11年	障がい (知的)
Q	男	30-39	8年	高齢
R	女	30-39	12年	児童
S	女	30-39	7.5年	高齢
T	男	40-49	14年	地域
U	男	50-59	20年	障がい
V	女	30-39	10年	地域
W	男	40-49	13年	障がい
X	女	50-59	10年	児童
Y	男	40-49	10年	障がい
Z	女	40-49	7年	児童

※ 障がい分野については分野が特定できる場合のみ明記した。

活用して調査への協力を依頼し、さらに、第二段階として協力者の専門職ネットワークを通して依頼した。協力者の選定にあたっては、支援分野にバリエーションを持たせることを意図した。

2. 調査方法

調査は、筆者自身が2013年6月から8月にかけて実施した。実践分野に偏りのないように協力者を6グループに分け、フォーカスグループ(以下FG)⁴⁾を実施した後、参加を希望した16名を対象

に個別インタビューを実施した。各々の長所を活かしつつ、各々の潜在的な短所を補い合うことを意図し、FGと個別インタビューの組み合わせを採用した。FGは、協力者同士の相互作用を通して多様な視点を得られるなど、協力者が学び合うことを可能にする(Morgan, 1997)。しかし、MacDougall and Baum(1997)が指摘するように、グループの他のメンバーの言動に自らの言動を合わせようとする「集団思考(groupthink)」が参加者の発言を狭める結果として、FGで得られる

データの幅を制限する可能性がある。個別インタビューでフォローアップすることで、そうしたFGの潜在的短所をできる限り最小化することを意図した。Michell (1999: 45) は、個別インタビューとの組み合わせにより「FGへの参加だけでは語られることのなかったであろう感情や経験を明らかに」しうることを指摘している。

インタビューの時間は、FGが約2時間、個別インタビューが約1時間で、半構造化インタビューを実施した。インタビューでは、SWerとしての自身に影響を与えたと思われる学びの経験において、1) どのように (How) 学びが得られたか、2) 何を (What) 学んだか、3) その経験を経たことで、支援する上で何か変化があったかについて協力者に語ってもらった。個別インタビューでは、FGで協力者が語った学びの経験についてのフォローアップの質問に加え、それ以外の学びの経験についても同様に語ってもらった。

3. 分析方法

データ分析については、ナラティブ分析における「テーマ分析」(Riessman, 2008)⁵⁾を用い、次のように行った。まず、逐語記録化した全てのインタビュー・データから、「より多くのことを語る一方で、謎 (puzzle) に包まれた」(Shaw and Holland 2014: 223) ように思われるインタビューをFGと個別インタビューから一つずつ選んだ上で、学びに関わると考えられる記述にコードを付与した後、トピックに応じてカテゴリライズし、暫定的な分析枠組みを作成した。次に、残りのデータの中でその分析枠組みに「容易にはフィットしない」(同上, p.223) と思われるいくつかのケースを選び、分析枠組みの見直しを繰り返し行った。これは既定の分析枠組みに適合するデータの収集に偏ることを避け、「予期しない、当惑させる、そして調和しない」(同上, p.223) データについて検討するためである。そして、その分析枠組みをベースに質的データ分析ソフトのMaxQDAを使い、残りのデータのコーディングを行い、さらなる見直しを行った。分析にあたっては、各々の学びの経験のストーリーの文脈に照らし合わせ、彼らが

使った言葉、特に「メタファー」に注目することで (McCracken 1988: 44)、彼ら自身がインタビューの中で行っている、自らの学びの経験の意味づけを研究結果に反映させることを目指した。

4. 倫理的配慮

調査の実施にあたり、調査目的や方法、匿名性の確保、結果の公表などについて、協力者に口頭及び文書で説明し協力の同意を得た。また、調査の実施前に、筆者の所属先大学であったヨーク大学(英国)のソーシャルポリシー&ソーシャルワーク学部に設置されている倫理委員会 (Ethics Committee) の承認を得た (2013年1月30日承認)。なお、以下で協力者の語りを提示する際に用いた氏名は全て仮名である⁶⁾。

IV. 結 果

協力者は自身の具体的な学びの経験を語る中で、福祉現場で直面する様々な困難についても語っていたのだが、彼らはそうした困難に対処することを通して多くの学びを得ていた。調査の結果、そうした困難はSWerの実践活動に伴う不確かさからもたらされており、さらに、多くの協力者にとって、その不確かさがSWerとしてのアイデンティティの不確かさに結びついていることが分かった。そうした、いわば「SWerであることの不確かさ」が何によってもたらされているかを分析したところ、1) 専門職としての役割の不確かさ、2) 価値に基づく実践の2つの要素が関係していることが明らかとなった。また、実践活動に伴う不確かさをどう捉え、どのように向き合っているかを協力者の学びの経験との関連から分析した結果、1) 確かさを求めて、2) 不確かさの受入れ、3) 確かさと不確かさの間でのバランスの3つのタイプに大別できることが分かった。

1. ソーシャルワーカーであることの不確かさ

1) 専門職としての役割の不確かさ

先述の通り、調査への協力依頼の際やインタビューの中で、少なくない協力者が自らをSWer

と称することへのためらいを示したのだが、ある協力者は「まあ10年働いてきましたけど、自分がソーシャルワーカーという意識はあまりなかったですね」と語っている。また、別の協力者は「私は社会福祉士の資格を取りまして、その後その資格を有意義に活かしているかという、まったく取りっぱなしのままで(笑)、活用しているという感じではないんですけど」と語っている。こうした語りからみえてくるのは、彼らが前提とするSWerの役割と彼らの実際の実践活動との間にギャップが存在するということである。そしてそのギャップが、自らをSWerと認識しSWerと呼ぶこと、さらにSWerと呼ばれることに違和感を与えているといえる。

では、協力者はSWerの役割についてどのような前提を持っているのであろうか。多くの協力者が、働く以前に大学等で学んだSWerの役割と、福祉現場で自らが実際に担っている役割との間に生じるギャップについて語っていた。障がい分野で支援に携わる会津は、そうしたギャップについて次のように語った：

直接支援、ダイレクトケアの部分がすごく多くて、相談の部分というのは、業務量全体からするとすごく少ないんですよ。直接に利用者に関わってという部分が大半を占めているというところから、自分の専門性って何だろうというような気持ちが出てきて、

会津が働く以前に前提としていたSWerの主な役割は「相談援助」であったが、実際の現場ではその割合は少なく、利用者を直接支援するケアワーク的な業務の割合が多いというギャップから、「ソーシャルワーカーとしてのアイデンティティはどうかということに働いてから迷うというか、学校で学んだことは、あくまで実際の仕事で必要なことの一部というふうに割り切って働いていた」と語っている。実際の現場において、SWerはそれぞれの支援の文脈に応じて、「相談援助」業務だけではなく様々な役割を担っている。そして様々な役割を担うことが求められるからこそ、

SWerの役割は曖昧さを伴い、外からだけではなく、SWer自身からもその役割が見えにくくなる。スクールソーシャルワーカーの広田は、SWerの役割の見えにくさに関し、「主役はあくまで子どもさんだったり、その家庭、親御さんという周辺だったり。さらにその周辺が学校だったりするので、あくまで私は脇役で、つなぎ役で、黒子的な役割」と語っている。

SWerの役割の見えにくさをどう捉えるかは協力者によって異なるが、そうした役割の見えにくさ、すなわち「専門職としての役割の不確かさ」が、自らの専門性を問い直すきっかけをもたらす。精神保健分野で働く長原は、SWerの専門性について次のように語る：

私らソーシャルワーカーって何をしている人なん？ 別にいらんちゃうん？ と言われるのは違うということを伝えていこうと思ったら、もっと色んなことを勉強しないといけないし、私らの専門性って何や？ というのを考えていかないといけないと思いますね。

日々の実践活動における医師や看護師、臨床心理士等の他職種との関わりの中で、自らの「専門職としての役割の不確かさ」が顕在化し、そのことがSWerの専門性への問いかけを生んでいる。以下は、障がい分野の川桁が語った、SWerの専門職としての役割への問いかけである：

社会福祉士としての位置づけとか、(～)専門職としての資格を持っている人とそうでない人の差というのはどこにあるのかということですね。そういう意味で考えると、うちなんかの普段の仕事からするとすごく考えるところがあるんですね。(～)社会福祉士を持つてからどうなんかなとか、これは言ったらあかんかもしれないですけどね。専門職として何を求められているのかなというあたりが、うまくまとめられないんですけど、そのあたりはよく感じるところですね。

川桁は自らの実践活動を振り返り、社会福祉士資格を持たない支援者と比べた際に、自身が専門職に値するだけの専門性を持っているかどうかを自問している。SWerの専門職としての役割へのこうした問いかけは、多くの協力者がそれぞれの現場で直面する困難を語る中で、言葉を換え幾度となく繰り返された。これらのことから、SWerの「専門職としての役割の不確かさ」が、「SWerであることの不確かさ」に結びついているといえる。

2) 価値に基づく実践 (Value-based practice)

次に、「SWerであることの不確かさ」に関し、ソーシャルワーク実践が「価値に基づく実践」であるという側面からみていく。SWerは日々の実践活動において何らかの判断をする際、様々な可能性の中から、その判断の元となる「エビデンス」を選び取っている。関都は、社会福祉士が参加する職場外の勉強会を通して得た、自らの専門職としての判断に関しての気づきを次のように語った：

事例研究とかで事例を出すと、それぞれの視点の違いとか、何を大事にしてという部分があるが、同じ社会福祉士の中でも違っていて。そうすると何が合っていて、何が違っていてということはないんですけど、大事なことを見落としていないのかとなると本当に不安になるんです。

上記の気づきは関都を揺さぶり、その結果として「自分がどれだけ物事を見れていないのかということが身に染みて、自分は仕事ができないというのですごく無力感を感じる」ようになったと語った。各々が選択するエビデンスをベースにして下される様々な判断は、SWerとして「何を大事にするか、すなわちSWer一人ひとりの「価値」に関わる。分析の結果、SWerが実践活動で行う判断がそれぞれの「価値」をベースにしたものであることが、「SWerであることの不確かさ」に関わることが分かった。

ここで、障がい分野の通所施設で働いていた上戸の例を紹介したい。上戸は多くの学びを得た経

験として、支援者それぞれの立場からの判断が衝突した担当ケースについて、次のように語った：

前に担当していたケースで、母子世帯で、お母さんが倒れられて入所施設に入ることになって、その本人さんは一人暮らしをするのか、それともどこかに入所するのかということ、支援センターさんと、あと、その方のご親族が集まってカンファレンスをして、(～)何度も開いたんですけど、極端のひとと、その極端の人が毎回けんかみたいになるような支援者の集団だったんですけど。それぞれのバイアスの中の意見のぶつかり合いで(～)。

このケースでは、通所施設としては「一人暮らしは大変という立場で、(～)とりあえずでも、どこかに入所してもらった方がいいんじゃないか」という判断だったのに対し、地域生活支援センターは「いかに障がい者本人の在宅での生活を支援するかというのが基本のスタンスなので、『この人は、ちゃんとヘルパーを入れたら一人で生活できるから、それでいくべきや』』という判断をする中、上戸本人は、「私も、正直、どっちがいいのかとか何とも言えない」という判断だった。多くの協力者が、それぞれの支援の文脈において行う判断が、支援者それぞれの「価値に基づく」ことで起こる様々な困難について語った。ここで強調したいことは、そうした困難をどう捉えるかは協力者一人ひとりによって異なるが、協力者はそうした困難に向き合うことを通し、SWerとして様々な学びを経験していたということである。

ここまで、協力者がSWerとしての学びの経験を語る中で述べた、現場で直面する様々な困難が「SWerであることの不確かさ」に関わることに ついて、1) 専門職としての役割の不確かさ、2) 価値に基づく実践という二つの側面からみてきた。次に、協力者がそうした「SWerであることの不確かさ」に対し、専門職としてどのように向き合っているかについて、彼らの学びの経験との関係からみていく。

2. 不確かさへの向き合い方とSWerとしての学び

分析の結果、「SWerであることの不確かさ」に向き合う中で経験する様々な学びを通して、協力者は自らの「専門職としてのあり方 (Professional ways of being)」(Dall'Alba, 2005; 2009; Sandberg and Pinnington, 2009) を再考し、それぞれの「SWerとしてのあり方 (Ways of being a social worker)」を育てていることが分かった。協力者の「SWerであることの不確かさ」への向き合い方は、1) 確かさを求めて、2) 不確かさの受入れ、3) 確かさと不確かさの間でのバランスの3つのタイプに大別できる。以下、各々のタイプを順にみていく。

1) 確かさを求めて (Quest for certainty)

一つ目は、実践活動における確かさを求め、理論やモデルというフォーマルナレッジを実践のベースに置くことで「SWerであることの不確かさ」に向き合うタイプである。

中山は以前の職場で行われていた支援に対し、「ひとつの支援をする際に、どうしてその介入を行ったかというはっきりとした根拠を示せない状態で、職員が見立てだとかを、いわば場当たり的な状態でしていくというのはどうなのか」と語った。さらに、専門職としての判断をする上でのエビデンスが、職員の実践経験から得た「勘」や「スキル」に基づいていることに対し、「それはおかしいじゃないかという疑問がずっとあった」と語り、そうした疑問を「福祉ではない職種、医師とか看護師とかを見て感じた」と述べている。中山にとって、そうしたソーシャルワーク実践活動の不確かさは、他職種と比べた際にSWerの専門性の低さを痛感する経験となった。そうした中、研修で学んだ行動分析の考えが中山を引き付け、行動分析をさらに学ぶために大学院への進学を決心させた。中山は、行動分析に引き付けられた理由を次のように語る：

行動分析の中のビヘイビア・サポートという、

本人の思いをどれだけ形にしていくか、拾い上げていくかという、そういう哲学的なところがパーソン・センタードに一致するところがあるなと思ったんですね。計画から実施、そして、評価というサイクルに則った支援をベースに進めていくところが、一番最初に感じた、職員の勝手な判断で支援を進めていくものではないんじゃないかという疑問に対する私なりの答えで。

行動分析が提供する、いわば明示的な「ルール」が、実践活動における不確かさを減らし、確かさを高めるための術を中山にもたらした。そして、「おそらく行動分析に出会わなかったら、福祉の仕事は続けていなかったかもしれないですね」と振り返るように、中山にとって行動分析を学んだ経験が、SWerを続ける上で大きなターニングポイントになった。このようにフォーマルナレッジにより重きを置き、確かさを探求するというやり方で「SWerであることの不確かさ」と向き合うのが、第一のタイプである。

2) 不確かさの受入れ (Accepting uncertainty)

上述の「確かさを求める」タイプに対し、2つ目は、実践活動に伴う不確かさを受入れた上で、自らの実践経験から得たインフォーマルナレッジに重きを置き、支援のやり方を発展させていくタイプである。喜久田は、SWerの役割についての自らの考えを次のように語る：

支援者としてその方の人生のある時期に関わる、とよく言われますけど、寄り添うことはできるけれども、根本的にその方の何かを変えたりということではできないというか、することは難しいなと思いますね。(～)最近では、本人さんにとって、昨日よりも今日が少しでもよければ、今日よりも明日がよければいいやんと思うようになってきたんですね。それが無計画と言われるかもしれないけど、そう思うようになってきて。(～)いい方向にしていく口添えはできますけど、結局見守ることしかできひんなあと、それでいいんじゃないかなと。もちろん支援者として最善

は尽くしますけど、

喜久田は、実践活動に伴う不確かさに向き合った様々な経験を通して得た、上記のような、いわばSWerの役割についての個人的な信念について語った。さらに喜久田は、ケースカンファレンスでどんなに話し合っても予想外のことが起こることで混乱する支援者に対して、「支援者の思うようにはならないですからね。(～)色々な思いで混乱する中で、しゃあないなと思えることも、ワーカーとしての一つの力かなと思うんですね」と語り、実践活動には不確かさが付き物であることを受入れることが、SWerとして重要であることを強調している。このように不確かさを減らして確かさを求めるのではなく、不確かさを実践活動の一部として受入れるというやり方で「SWerであることの不確かさ」と向き合うのが、第二のタイプである。

3) 確かさと不確かさの間でのバランス (Balancing certainty and uncertainty)

最後は、「確かさ」と「不確かさ」の間で自分なりのバランスを見つけることで、「SWerであることの不確かさ」に向き合うタイプである。先の二つのタイプが、「確かさ」と「不確かさ」という両極であるとする、この第三のタイプはその間に位置するが、両極の間ということではなく、その間には様々なグラデーションがあることをここで強調したい。

郡山は、過去のケースで効果のあったやり方を支援のベースにすることに対し、「パターンに当てはめて見ていくことを決して否定しているわけではなく、それも一つの戦法なんです」と述べ、支援に確かさを求めることの有効性を認めつつ、次のように語る：

相談でも、もうこの人にはこういうパターンで攻めればいいのか。事例検討会でも、こういう家族にはこういうパターンで攻めればいいのか、こんなパターンを流用すればいいんじゃないかなとか。でも、それを先に持っていっちゃうと、

こてんと自分がこけちゃうことが何度もあったので、

さらに、郡山は支援をする上で心掛けていることとして、「プランありきではなくて、まあ理想論的な発言かもしれませんが、まず、その方の実生活を真っ白な気持ちでみるという姿勢は崩さないように」していると語り、確かさを求めるがゆえに支援をパターン化することを自戒している。こうした確かさと不確かさの間で自分なりのバランスを取るという向き合い方は、郡山の学びにも反映されている。郡山は、実践経験から得た様々な気づきをベースにして支援をすることに対し、「自分の中で説得力をもってそのことが落ちてこないというか、何か自分が思っているだけなのかなみたいな」と語り、インフォーマルナレッジにのみ頼ることを疑問視している。郡山は自らの学びについて、「自分の中の気づきに裏づけを与えていってというのが、自分の中で意識している学びの方法ですね」と述べ、自らの気づきに「裏づけ」、すなわち確かさを加味するために、様々な研修や支援者自身が組織する勉強会や事例検討会等に積極的に参加するようにしていると語った。

以上、3つのタイプを通して、協力者が日々の実践活動の文脈の中で不確かさをどう捉え、どのように向き合っているかについて、彼らの学びとの関係からみてきた。不確かさをどう捉えるかは協力者一人ひとりによって異なり、その捉え方がSWerとしての支援のやり方や彼らの学び、さらには彼らの「SWerとしてのあり方」にも反映されていることが明らかとなった。この三者は別個に分けて捉えるのではなく、それぞれが相互に分かちがたく結び付いたものと捉えることが必要である。

V. 考 察

本稿では、協力者のSWerとしての学びの経験を調査する中で浮かび上がってきた「SWerであることの不確かさ」が、1) SWerの専門職としての役割の不確かさ、2) 価値に基づく実践活動から

もたらされていることを明らかにした。さらに、SWerの実践活動に伴う不確かさへの向き合い方が、支援のやり方のみならず、彼らの学びや「SWerとしてのあり方」とも密接に関連していることが分かった。以下では、この三者の関連について考察する。

「II. 問題の所在」で述べた通り、SWerの実践活動に伴う不確かさに対する対照的な見方は、SWerの知識のあり方の捉え方を規定する。これは、ソーシャルワーク及びSWerの性質に関する「サイエンス vs アート」の論争に相当することが指摘できる。さらに、「IV. 結果」の「2. 不確かさへの向き合い方とSWerとしての学び」で取り上げた協力者の例と関連づけることができよう。ソーシャルワークが「サイエンス」であることを重要視する見方は、「確かさを求める」中山の例と、そして、ソーシャルワークの「アート」としての側面を重要視する見方は、「不確かさを受入れる」喜久田の例と結びつけることができる。しかしながら、ソーシャルワークを「確かさ」としての「サイエンス」と、「不確かさ」としての「アート」に分ける見方は、どちらが上位かという二者択一の議論になることが避けられない。それは、双方からの相互批判を招くだけでなく、SWerの実践活動への理解を限定することにつながる。

専門職の知識に関して、フォーマルナレッジか、インフォーマルナレッジかという二者択一の理解の仕方では、SWerが実践活動で用いる様々な形態の知識を包含することはできないことから、SWerのナレッジベースを広範に捉える必要があることが強調されている (Evans and Hardy, 2010; Parton, 2000; Payne, 2001)。実際の現場では、Nilsen et al.(2012) が指摘するように、SWerが判断をする際にどの形態の知識を用いているかは曖昧であり、フォーマルナレッジとインフォーマルナレッジは相互に絡み合っている。これらの指摘は、「確かさと不確かさの間でのバランス」で取り上げた郡山の例とも符合する。「確かさ」と「不確かさ」、すなわちフォーマルナレッジとインフォーマルナレッジの間でどのようにバランスを取るかは、SWer一人ひとりによって異なるが、

協力者の多くはどちらか一方ではなく、両者を用いることの重要性を認識していた。

しかしながら、近年のEBPという大きな潮流の中で、「確かさ」としてのフォーマルナレッジにより重きが置かれ、「不確かさ」としてのインフォーマルナレッジが軽視される流れが強まっている。それに伴い、「SWerとしてのあり方」についても「確かさ」を求める方へとシフトし、SWerの実践活動が様々なレベルで規制される中、「確かさ」を求める以外の「SWerとしてのあり方」が見過ごされてきたのではないだろうか。そのことが、所属組織や職能団体等を含む専門職コミュニティから求められる、SWerはかくあるべきという理想の「SWerとしてのあり方」と、実際の実践活動の文脈の中でSWer自身によって育まれた、現実の「SWerとしてのあり方」との間にギャップを生んでいるといえよう。そのギャップが、「I. はじめに」で述べたように、自らがSWerと呼ばれること、そして自らをSWerと呼ぶことを“SWerに”ためらわせているのではないだろうか。SWerはそのキャリアを通し、「確かさ」と「不確かさ」という両極の間で自分なりのバランスを探しながら、それぞれの「SWerとしてのあり方」を育んでいく。ここで、ある協力者の語りを紹介したい：

ソーシャルワークの定義っていろいろありますが、僕が好きなのは、「科学と価値に基礎づけられた技能」、「サイエンスとバリューに基礎づけられたアート」という言葉が好きで。僕は職人だと思っていますね。

「SWerとしてのあり方」は、SWer一人ひとりによって異なる。SWerとしてそれぞれの分野で支援に携わりながら、自らをSWerとしてアイデンティファイすることに疑義を抱くという、他の対人援助職からは“奇妙”に映るであろう状況を変えるためには、専門職コミュニティのみならず、SWer自身からも「SWerとしてのあり方」の多様性が理解される必要がある。

さらに、「SWerとしてのあり方」は彼らの学び

とも密接に関連していることを述べたが、Dall'Alba (2009:43) は「専門職としてのあり方 (Professional ways of being)」について、「専門職としてのあり方を学ぶことは、知ること (knowing)、行動 (acting)、そして当該の専門職である (being) ことを統合することを通して起こる」と述べている。協力者が語った学びの経験の背景には、それぞれの「SWerとしてのあり方」が溶け込んでおり、彼らがSWerとして何に価値を置いているか、そして、自らを専門職としてどのようにアイデンティファイしているかによって彼らの学びは形作られていた。彼らの多様な学びを理解するには、一人ひとり異なる「SWerとしてのあり方」を理解することが不可欠といえよう。

VI. 終わりに

最後に、本研究の限界と今後の課題について述べたい。分析方法に関し、本研究では協力者の語ったストーリーを小さなチャンクに分割せずホリスティックに捉えるために、ナラティブ分析における「テーマ分析」を用いた。データの提示にあたっては、彼らのナラティブの意味が失われないように長い引用をすることを試みたが、字数の制限上、提示できなかったデータが数多く残されている。そのことで、読者による他の解釈の可能性が制限されていることを指摘したい。

今後の課題としては、ケーススタディの手法を用いて社会福祉関連機関・施設の組織文化についての調査を実施することが挙げられる。「SWerとしてのあり方」は、所属機関・施設において培われてきた、それぞれ独自の組織文化の中で育まれていく。本研究では十分に論じることができなかったが、そうした組織文化についての理解を深める上で、ある機関・施設への長期間に渡るエスノグラフィー調査は有効な手法といえるだろう (Alvesson and Sveningsson, 2008; Gherardi and Nicolini, 2006)。そうした調査を通し、SWerが実際の支援の文脈の中で、専門職としてのアカウントビリティと自律性との間でバランスを取りながら、それぞれの「SWerとしてのあり方」を育む

上で必要なサポートについての示唆が得られるかもしれない。

謝 辞

本調査に快くご協力頂いた協力者の皆様、そしてリサーチチームのメンバーの皆様にご心より感謝申し上げます。また、筆者の留学をご支援頂き、本調査の実施にあたっても多大なご支援を頂いた京都国際社会福祉協会の所久雄理事長、スタッフの皆様には深謝申し上げます。

注

- 1) 本稿は、筆者がヨーク大学 (英国) に提出した博士論文 (「Professional learning as a way of being a social worker: Post-qualifying learning among Japanese social workers」) の一部を加筆・修正してまとめたものである。博士論文では、SWer自身がどのような経験を学びと捉えているか、そして、SWerとしてそれぞれの支援の文脈の中でどのように学び続けているかについて考察した。
- 2) 調査対象者の実践経験を10年程度以上としたのは、3年程度の初任者よりも多様な学びの経験があると考えたからである。
- 3) 協力者の実践分野はインタビュー参加時のものであり、過去に従事した経験のある分野は含まれていない。
- 4) 質的調査におけるフォーカスグループを表す用語として、他にも「フォーカスグループインタビュー」、「グループインタビュー」、「フォーカスグループディスカッション」等があり、しばしば区別されることなく用いられている。本研究では「グループへの参加者それぞれに対して同じ質問 (または質問リスト) をする」のではなく、「参加者間の相互作用を促し、分析する」(Barbour, 2007:2) ことを意図し、FGという用語を使用する。
- 5) Riessman (2008) は、ナラティブ分析を以下の4つのアプローチに分類している: (1) テーマ分析 (Thematic analysis); (2) 構造分析 (Structural analysis); (3) 会話・パフォーマンス分析 (Dialogic/Performance analysis); (4) ヴィジュアル分析 (Visual analysis)。
- 6) 協力者の仮名表記については、調査データの再現性や妥当性の検証の観点から、同一の協力者の発言を読者が容易に確認できることを意図した。なお、使用した仮名から協力者の特定ができないよう配慮した。

文献

Alvesson, M. and Sveningsson, S. (2008) *Changing organisational culture: Cultural change work in progress*, Routledge.

- Asano, T.(2015) Professional learning as a way of being a social worker : Post-qualifying learning among Japanese social workers, Unpublished PhD thesis, University of York, UK.
- Barbour, R. S.(2007) *Doing Focus Groups*, SAGE Publications.
- Beck, U.(1992) *Risk society : Towards a new modernity*, SAGE Publications.
- Dall’Alba, G.(2005) Improving teaching : Enhancing ways of being university teachers, *Higher Education Research & Development*, 24, 361-372.
- Dall’Alba, G.(2009) Learning professional ways of being : Ambiguities of becoming, *Educational Philosophy and Theory*, 41, 34-45.
- Evans, T. and Hardy, M.(2010) *Evidence and knowledge for practice*, Polity Press.
- Evetts, J.(2008) INTRODUCTION : PROFESSIONAL WORK IN EUROPE, *European Societies*, 10, 525-544.
- Fish, D.(1998) *Appreciating practice in the caring professions : Refocusing professional development and practitioner research*, Butterworth-Heinemann.
- Fook, J.(2007) Uncertainty : the defining characteristic of social work?, Lymbery, M. and Postle, K.(eds) *Social Work-A Companion to Learning*, SAGE Publications, 30-39.
- Gambrill, E.(2007) Views of evidence-based practice : Social workers’ code of ethics and accreditation standards as guides for choice, *Journal of Social Work Education*, 43, 447-462.
- Gherardi, S. and Nicolini, D.(2006) *Organizational knowledge : The texture of workplace learning*, Blackwell Publications.
- Gray, M., Plath, D. and Webb, S.(2009) *Evidence-based social work : A critical stance*, Routledge.
- Helsing, D.(2007) Style of Knowing Regarding Uncertainties, *Curriculum Inquiry*, 37, 33-70.
- Higgs, J. and Titchen, A.(2008) *Professional practice in health, education and the creative arts*, Blackwell Science.
- 堀越由起子 (2016) 「巻頭言：ソーシャルワーカーという名前」『ソーシャルワーク実践研究』(ソーシャルワーク研究所) 4, 1.
- Howe, D.(1994) Modernity, Postmodernity and Social Work, *British Journal of Social Work*, 24, 513-532.
- Hugman, R.(2005) Looking Back : The View from Here, *British Journal of Social Work*, 35, 609-620.
- 空閑浩人 (2012) 「序章 ソーシャルワーカーとその実践を支える『知』の形成」『ソーシャルワーカー論—「かわり続ける専門職」のアイデンティティ』ミネルヴァ書房.
- Kuzel, A. J.(1992) Sampling in qualitative inquiry, Crabtree, B. F. and Miller, W. I.(eds) *Doing Qualitative Research*, SAGE Publications, 31-44.
- Littlechild, B.(2008) Child Protection Social Work : Risks of Fears and Fears of Risks—Impossible Tasks from Impossible Goals?, *Social Policy & Administration*, 42, 662-675.
- MacDougall, C. and Baum, F.(1997) The Devil’s Advocate : A Strategy to Avoid Groupthink and Stimulate Discussion in Focus Groups, *Qualitative Health Research*, 7, 532-541.
- McCracken, G.(1988) *The Long Interview*, SAGE Publications.
- Michell, L.(1999) Combining focus groups and interviews : Telling how it is ; telling how it feels, Barbour, R. S. and Kitzinger, J.(eds) *Developing Focus Group Research : Politics, Theory and Practice*, SAGE Publications, 36-46.
- Morgan, D. L.(1997) *Focus groups as qualitative research (2nd ed.)*, SAGE Publications.
- Nilsen, P., Nordström, G. and Ellström, P. E.(2012) Integrating research-based and practice-based knowledge through workplace reflection, *Journal of Workplace Learning*, 24, 403-415.
- 太田義弘編 (2009) 『ソーシャルワーク実践と支援科学』相川書房.
- Parton, N.(1994) ‘Problematics of Government’, (Post) Modernity and Social Work, *British Journal of Social Work*, 24, 9-32.
- Parton, N.(2000) Some thoughts on the relationship between theory and practice in and for social work, *British Journal of Social Work*, 30, 449-463.
- Payne, M.(2001) Knowledge Bases and Knowledge Biases in Social Work, *Journal of Social Work*, 1, 133-136.
- Riessman, C. K.(2008) *Narrative methods for the human sciences*, SAGE Publications.

- Sandberg, J. and Pinnington, A. H.(2009) Professional Competence as Ways of Being : An Existential Ontological Perspective, *Journal of Management Studies*, 46, 1138-1170.
- Schön, D. A.(1983) *The reflective practitioner : How professionals think in action*, Basic Books.
- Shaw, I. and Holland, S.(2014) *Doing Qualitative Research in Social Work*, SAGE Publications.
- Sheldon, B.(2001) The Validity of Evidence-Based Practice in Social Work : A Reply to Stephen Webb, *British Journal of Social Work*, 31, 801-809.
- 芝野松次郎 (2005) 「エビデンスに基づくソーシャルワークの実践的理論化—アカウントブルな実践へのプラグマティック・アプローチ」『ソーシャルワーク研究』31(1), 20-29.
- 芝野松次郎 (2011) 「ソーシャルワーク実践と理論をつなぐもの—実践モデル開発のすすめ」『ソーシャルワーク学会誌』23, 1-17.
- Thyer, B. A.(2004) What is evidence-based practice?, *Brief Treatment and Crisis Intervention*, 4, 167-176.
- Thyer, B. A.(2008) The Quest for Evidence-Based Practice? : We Are All Positivists!, *Research on Social Work Practice*, 18, 339-345.

Uncertainty in Being a Social Worker : An Exploration of Professional Learning of Social Workers

Takahiro Asano (Japan Lutheran College)

Keywords : Certainty/Uncertainty, Formal/Informal Knowledge, Professional learning, Ways of being Social workers

This study examines how experienced social workers—who had around ten years of practice experience—see and deal with “uncertainty” embedded in day-to-day practice, through exploring how they learn as a professional. Using qualitative data from the 26 participants in the interviews, showed that the challenges and struggles they faced were related to the issues of uncertainty in being social workers. The issues were involved in the two aspects identified : uncertainty about role of social workers ; and value-based practice. The findings

demonstrate that how the social workers address the issues of uncertainty in their working context can shape their learning experiences. The ways in which they face the issues are divided into the three types : quest for certainty ; accepting uncertainty ; and balancing certainty and uncertainty. The ways to tackle the issues of uncertainty can be closely related to their “ways of being a social worker”. It can be argued that we cannot understand their learning without setting each person’s learning experiences in the context of their way of being a social worker.